

2005 年度 森村・川村ゼミ議事録

4 月 27 日分

記入者: 岩永智典

司会者: 武道良子

文献: 「理念としてのバウハウス」利光 功(『バウハウスとその周辺1』より)

発表グループ

A(深井・藤村・柳瀬)

B(山田・石原・豊島)

議題

1. グループBの考察より「…バウハウスは、…国民を動かす絶大な力を持っていたことは確かだった…」 →本当にバウハウスは当時絶大な力持ちえたのか？
2. 建築によって生活内の行動が変化した経験はありますか？

グループの考察

1. バウハウスはドイツ国民や社会を動かす力を持ち得た。A・B
B…第一次世界大戦後の混乱した無秩序な社会という不安が、バウハウスというひとつの文化的運動の力が働く磁場としての役割を果たし、その力を発揮できた。

議論の展開

1. A…当時の社会的危機に対して、建築という手段が直接的な成功を収められたかどうかは言えない。しかし、グロピウスの唱えたバウハウスの「理念」を「建築」という形で現実化できた、という意味では力があつたと言えるだろう。

——グループA・Bの考察は相反するものか？

社会的な不安を抱えていたからこそ、理念を建築という形に現実化することが可能になった、つまりバウハウスは戦間期という時代背景なくしては存在し得なかったともいえるのではないだろうか。その意味でAとBの考察には関係性がある。

2. 建築によって私たちの生活は変化するのか？
～自分(人間)と建築について考えてみる～

- EX1. 森ビルやポアソはそれぞれ、六本木と法政の象徴的イメージとして捉えられる。
EX2. 新宿高島屋は窓ガラスを通して、出来るだけ客が内から外を見れないようにして

いる。外の天候によるお客への影響を回避するため。

EX3. バーミヤン

・周りの景観に溶け込まない奇抜な色使い(黄、紫)

→客引きにはよいかもしれない

→他の文脈から逸れている。自立し過ぎている。

生活環境を無視して、それを見せるだけの建築になっている。それは「作品」としての建築の在り方であろう。

——それこそポスト・モダンの建築と呼べるだろう。

ここまでは外見による判断で建築を見てきたが、もっと建築の内部や使う側から判断していく必要がある…

ところで…

Q. なぜ、バウハウスは最終目標である建築を目指す上で、芸術を統合しなかったのか？

→“芸術のための芸術”、すなわち 19 世紀のいわゆるサロン芸術の動向に対する批判がその根底にある。つまりそれは自立性と純粋性を目指すために、芸術の背景をなす現実から遊離してしまっており、芸術と生活を結び付けなければならないとグロピウスは考えたから。

記入者の考察

両グループの考察にもあったように、バウハウスは戦間期という時代とドイツという地理的条件のもとではじめて、その教育理念を建築という目に見える形で残すことが出来た。その理念ではあらゆる諸芸術の統合を目指された、それと同時にその最終目標である建築面では、一般労働者にも安価で良質な住宅を供給すべく、その生産の合理化が追及されたが、そこで生まれた住宅は結果的には上流階級の人の手には渡らない高級住宅の印象がぬぐえないものになってしまったとも言われている。そのような経緯をふまえると、バウハウスが当時のドイツ社会や国民に影響力を持ったかどうかということよりも、ひとつの教育機関としてのバウハウスが、それ以降の美術・デザイン教育の模範となっていったことのほうが重要ではないかと思われる。そういう意味で、バウハウスが閉鎖されて約70年の月日を経た今日でもその理念や教育スタイルが再考されているのではないかと思う。